

【図表3】これからの入学前教育に求められること

これまでの入学前教育	学び経験の変化	大学生の気質の変化	これからの入学前教育
<b>教育者の目線</b> 教員が学生に身に付けてほしい知識を付ける	高校までに 対話的・探究的に 学ぶ機会が増加	大学入学後も 過半数が 受け身・生徒化	<b>学習者の目線</b> 学生がなぜ、何を学ぶかを理解し成果を実感できる
<b>合格後の空白期間を埋める</b> 入学までの間、学習を継続する	<b>学生の二極化による 指導負担の増大</b>		<b>合格後に高校生を大学生へと育てる</b> 入学までの間、大学で学ぶための準備をする
<b>基礎学力・知識向上</b> 学部教育で学ぶうえで必要な基礎知識を付ける			<b>基礎学力・知識向上</b> + 学びに向かう動機付けや目的意識の醸成

【図表4】2025年度入学者の入学前教育検討スケジュール

	2023年度			2024年度			2025年度
	4月	7月～8月	9月	12月～3月	4月	7月～8月	9月
<b>新課程</b>	新課程 1期生が高2	オープン キャンパス		新課程 1期生が高3	オープン キャンパス		新課程 1期生が入学
<b>旧課程</b>	旧課程 世代受け入れ		旧課程世代最後の選抜 旧課程世代入学前教育	旧課程世代 最後の受け入れ			
<b>新課程</b>					新課程世代最初の選抜 新課程世代入学前教育		新課程世代 最初の受け入れ
<b>入学前教育検討例</b>	効果検証 内容・対象の再設計	実施を OCでPR	効果検証 モデルとなる対象 (学部等)で実施	効果検証 FD・SDで学内共有	効果検証 OCでPR	全学的な実施	新課程世代 最初の受け入れ
	高校教員と入学前教育のあり方を議論			全学実施の検討			

入学前教育に関する困り事を大学に聞くと、「担当する組織や責任者がはっきりしていない」「成果検証が不十分」という声がよく挙がります。これらの根底には、目的を見直さないうまま入学前教育を実践しているという実態があるのではないのでしょうか。

どの組織が担当するかは、目的によって異なります。課題が、入学者の学習意欲向上なら入試部門、初年次教育につながる基礎学力の向上なら教務部門で、一連のしくみを検討すべきでしょう。また、成果指標も、基礎学力のスコアだけでなく、入学後の学習態度や学びへの積極性など、目的によって異なるはずです。

入学前教育の再構築にあたっては、高校とのコミュニケーションを深めることも大切です。ある大学は地域の高校と連携し、年内入

を高め、消極的な学生には「なぜ大学で学ぶのか」をしっかりと意識付けして、大学の学びに必要な学習態度を獲得させるのです。このように、高校生を大学生へと育てる入学前教育こそが、今後求められると考えます。

**育成したい人材像を  
高校と大学が語り合う**

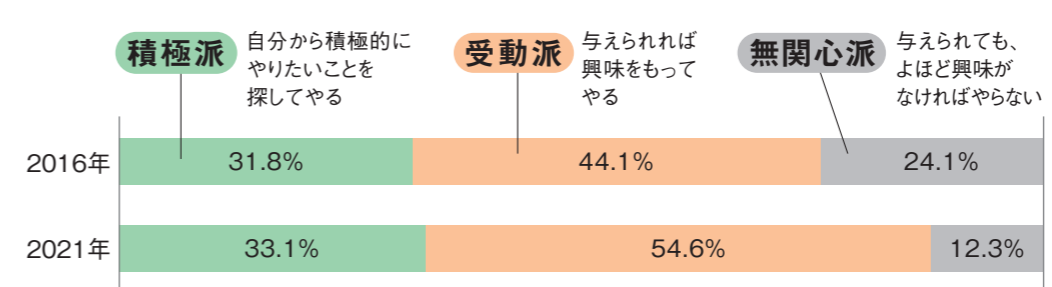
試験合格者に「入学までに成し遂げたい目標」と「それを達成するための計画」を書くワークシートを課題として出しています。入学予定者は目標を立てて計画を実行し、高校教員にコメントを書いてもらったうえで大学にシートを提出します。これは、高校と大学が協力して、目標設定と計画を実行することの価値を生徒に学ばせる試みです。このように、高校と大学が「生徒・学生に身に付けてほしい力」を共通認識として持ち、それを実現するためのしくみをつくることは、高大連携の理想形の一つではないでしょうか。

こうした連携の実現のために、普段から、大学教員と高校教員が教育についてフラットに話し合う機会を持ちたいものです。近年、大学教員が探究学習の支援等で高校に向く機会が増えているはずですが、この機会に高校教員と、若者に身に付けてほしい力について議論してはいかがでしょうか。

【図表4】は新課程1期生が大学に入学する2025年度までの入学前教育検討スケジュールです。一部の学部で試験的に導入するにしても、試行できるのは2024年度入学者のタイミングしかありません。ぜひ、今から動き始めていただきたいと思います。

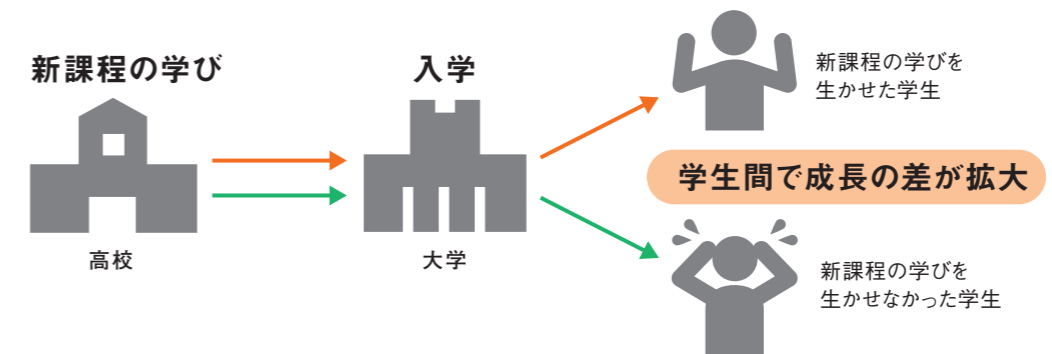
## 高大接続5 入学前教育でつながる

【図表1】学びの機会や課題を与えない「受動派」学生が増加



※ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習・生活実態調査」(2021年12月実施、全国の大学1～4年生対象、n=4,124)

【図表2】新課程への移行で予想される学生の二極化



2022年度、高校で新課程の教育が始まりました。これに伴い、高校生の学びへの姿勢が変化することが予想されます。受け入れた学生を「自ら学び続ける学生」に育てるには、これまでとは異なる工夫も必要です。特に、高校と大学の学びをつなぐ入学前教育は、より重要になると考えられます。

まず、すでに起こっている学生の変化から見えていきましょう。複数の大学関係者にヒアリングすると、「学生が高校と大学の学びの違いを理解していない」という声がかかりました。大学では、学生自身の主体的な学びの姿勢が求められるにもかかわらず、高校時代のようなサポートを求める学生が増えていると言っています。また、決められた枠組みの中でしか行動できない学生も少なくないと言います。大学生対象の調査でも、学

びの機会や課題を与えないと動かない「受動派」の学生が過半数を占めています【図表1】。

今後、新課程での探究的な学びをふんだんに経験し、学びたいテーマが明確な学生が入学するようになると、大学での学びに積極的な学生が増えるはずですが、他方、探究的な学びが不十分で、与えられた課題をそつなくこなすだけの「生徒化した学生」も増えると考えられます。この学生の二極化が進行すれば【図表2】、指導にあたる教員の負担の増大が懸念されます。

この二極の差を拡大させないために重要なのが、入学前教育です。これまでの入学前教育は、早期に合格が決まった生徒の基礎学力を補填することが主な目的でした。今後は、基礎学力と動機付けの両面で大学の学びに接続させる目的で再設計すべきでしょう【図表3】。意欲が高い合格者には入学前に大学教育の一端を見せて期待

# 学生の気質変化とこれからの入学前教育

新課程生の受け入れにあたっての入学前教育の見直しについて提言する。



(株)進研アド 営業本部 教育企画営業部 部長 大橋 英也

おおはしひでや ●各地域の高等教育機関の学生募集や教学改革の支援に従事。関西地区では高校の教育支援も担当。幅広いエリア、学齢の教学・教育支援の経験を生かし、高大接続期の教学課題解決に携わる。